

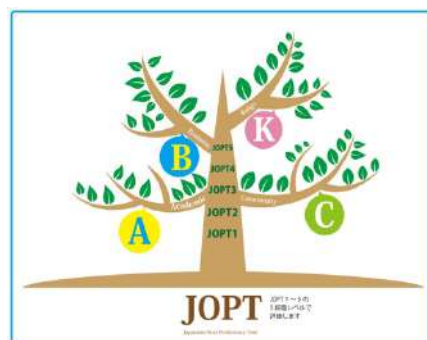


『JOPT テスターマニュアル』

(暫定版)

2023

本マニュアルは「日本語口頭能力テスト JOPT (Japanese Oral Proficiency Test)」の実施に関わる全ての方々を対象に書かれた「暫定版マニュアル」です。JOPTのみならず、口頭能力テストを一度も行ったことのない一般の方から、日本語教育の経験豊富な方まで広く、また、公平にテストが行えるように配慮しましたが、ある人には「過剰」であったり、あるいは、「不十分」であったりするかと思われます。多方面からのご意見をいただければ幸いです。



JOPT 開発メンバー

平成 29～32 年度科学研究費助成事業基盤研究 (A) 17H00919
JOPT の拡充と普及：汎用性と実用性に富む日本語口頭能力試験の実現

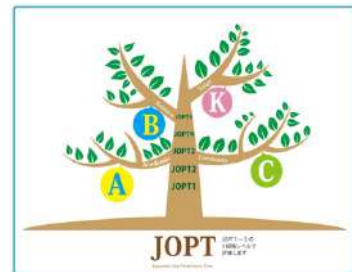
構成

はじめに	1
第1部 JOPT とは何か：日本語運用能力（プロフィシエンシー）の測定	
1. JOPT とは：15分で明らかにする日本語の口頭能力テスト	4
1.1 JOPT で捉える口頭能力とは	
1.2 口頭能力を構成する要素：ことばの機能的な側面と形式的な側面について	
2. JOPT による口頭能力の測定法と評価基準： インタビューによる発話サンプルの採集とその評価	6
2.1 JOPT によるインタビューの形式と特徴	
2.2 評価基準について：現実世界の会話活動とルーブリック表による数値化	
2.3 4領域のJOPTとそれぞれの能力規定：アカデミック日本語口頭能力（JOPT-A）、ビジネス日本語口頭能力（JOPT-B）、コミュニティ日本語口頭能力（JOPT-C）、介護日本語口頭能力（JOPT-K）	
第2部 JOPT の実施：テストの形式、インタビューの行い方、発話データの評価・評定	
3. JOPT の構成：Step 1（ウォームアップ）、Step 2（描写・記述力など）、 Step 3（意見述べなど）	13
4. インタビューの行い方：効果的な発話サンプルの採集法	16
4.1 実施場所の設定	
4.2 インタビューの進め方：JOPT-A（アカデミック領域）を例に	
4.3 JOPT-B（ビジネス領域）、JOPT-C（コミュニティ領域）、JOPT-K（介護領域）におけるロールプレイの実施について	
5. 発話サンプルの評価と評定	22
5.1 JOPT による評価と評定：項目毎の点数配分と総合評定点	
5.2 評価の方法	
5.3 実際の発話例	
5.4 その他注意事項	
おわりに	31
参考文献	34
表・図一覧	35
巻末資料	36

はじめに

ことばの教育、特に、外国語教育の歴史は異文化間を直接結ぶ話しことばの教育を無視して語ることはできません。とりわけ、インターネット技術の目覚ましい発達の中、自然な言語使用場面をビデオ化し、それを教材に使うことも簡単にできるようになりました。しかし、外国語能力の測定となると、未だ、読み、書き、聞き取りの域を脱することができていないのが現状です。日本語の場合、1984年に端を発する日本語能力試験(JLPT)においても、何度か、口頭能力の評価を組み入れる試みがなされたものの、その試みは放棄されているような状態にあります。それには様々な理由があります。そもそも口頭能力とは何であるか定めにくいこと、また、たとえそれが規定でき、優れた口頭能力テストを作成できても、他の技能のように多人数の受験者を対象に一斉に測定することができないため、実用性が確保できない面があります。

私たちはこのような現実は何らかの方法で克服できるものと考え、2013年より日本学術振興会科学研究費(科研費)の支援を受け、日本語口頭能力テスト JOPT (Japanese Oral Proficiency Test) という名称のもと、**妥当性、信頼性を維持しつつ、かつ、実用性、多様性に応える口頭能力テストの開発**を始めました。口頭能力テストであるのに、読解テストに類するような質問(「これ、どう読みますか」)などは全く妥当なものとは言えません。その点、JOPTはインタビューによって直接日本語の発話データを採集し、それをもとに、受験者が日本語を介した現実の活動をどれほど、どのように行えるのか、その口頭面の「**プロフィシエンシー**」(運用能力)を推測します。測るべきものを直接測るという点において、極めて高い**妥当性**を有する口頭能力テスト作りを目指しました。一方、**信頼性**はテスター間におけるテスト結果の一致(評価者間信頼性)によって担保する方法を指しますが、この点においても JOPTは JOPT グループメンバーによる試行の結果、適切な信頼性を保っています。また、**実用性**はテストの使いやすさ、そして、**多様性**は日本語の学習目的、また、使用領域が広範囲になっていることを意味しています。このような実状に応えるべく、JOPTは、一般の教育現場、ビジネスの世界、定住者コミュニティ、さらに介護の現場における日本語の運用能力測定を目指しました。**アカデミック日本語口頭能力(以下、JOPT-A)、ビジネス日本語口頭能力(以下、JOPT-B)、コミュニティ日本語口頭能力(以下、JOPT-C)、介護日本語口頭能力(以下、JOPT-K)**の4領域を設け、対面による、しかも、およそ15分という短い時間で、それぞれの領域の現場に関わる方なら誰でも実施可能な5段階のレベルからなるテストモデルの作成に励みました。



こういった背景のもと、モデル化を目指した日本語口頭能力テスト JOPT は次のように特徴づけることができます。

(1) **高い妥当性を持つ：**

対面（あるいはオンライン）によるインタビューにて受験者から直接生の発話を採集し、それを評価する。



(2) **多様な日本語学習の目的に対応している：**

JOPT-A（アカデミック）、JOPT-B（ビジネス）、JOPT-C（コミュニティ）、JOPT-K（介護）の4領域を提供し日本語学習の多様性に応える。

(3) **イラスト、グラフなどの使用により現実世界における課題を可視化している：**

それぞれのテスト領域における現実性の高い話題をイラスト化し、また、アカデミック領域では頻繁に用いられるグラフを使用するなどして、インタビューをより効果的に進められるようにデザインされている。



(4) **5段階のレベル設定による現実世界における口頭能力を測る：**

受験選択領域における会話活動をどの程度行えるかを JOPT 1~5 のレベルで示す。

(5) **利便性、実用性に富む：**

各領域約 15 分の短時間でインタビューの実施が可能である。また、日本語を母語とする、しないに関わらず日本語教師なら誰でも、日本語教師でなくとも国際交流に関わる方なども簡易な研修を受けたのちテストを実施できる。

この「テスターマニュアル」は上記のような特徴を持つ JOPT をより効果的に実施し、また、より公平な評価ができるテスト実施のための研修を目的に作成しました。

第1部 JOPT とは何か：日本語の運用能力（プロフィシエンシー）と測定

第2部 JOPT の実施：テストの形式、インタビューの行い方と発話データの評価・評定

第1部では日本語の運用能力（プロフィシエンシー）とは受験者が現実の生活場面において日本語を使ってどれほど活動できるかを示すものとし、その口頭面を扱う JOPT がどのようなテスト構成になっているかを示します。第2部では JOPT の中核を担うインタビューをどのように実施し、インタビューの中で与えられた課題に対する個々の発話データ

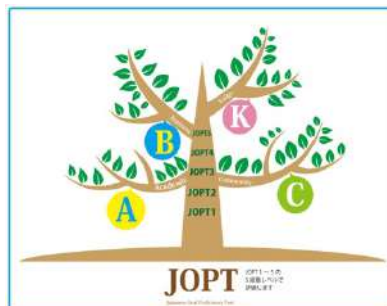
をどう**評価**し、その評価を基に受験者自体の総合的能力レベルの判定（それを**能力評定**と言います）をどのように行うかについて述べます（p.8 表1 参照）。JOPTによる**能力評定**は大きく分けて5段階（JOPT 1～ 5）を設けています。さらにそれぞれのレベルにH/M/L（高/中/低）の下位区分を加えます。

本マニュアルは日本語教育を専門にする方にはくどいと思われるほど分かりきった事柄もあれば、専門家ではない方には、さらに説明が必要な箇所もあるかもしれません。テストの皆さんが全員、公平、かつ、客観的な評価、評定ができるよう最善の努力を試みましたが、十分ではない点も多々あるかと思えます。忌憚のないご意見を聞かせていただければ幸いです。

第1部 JOPT とは何か:日本語の運用能力(プロフィシェンシー)の測定

1. JOPT とは: 15 分で明らかにする日本語の口頭能力

JOPT は **Japanese Oral Proficiency Test** (日本語口頭能力テスト) を略したものです。一つの領域につき 15 分ほどの対面、あるいは、オンライン上のインタビューで受験者と向き合い、イラストやグラフを資料にして、日本語の口頭面における運用能力値を探ります。受験者は4つの領域(アカデミック、ビジネス、コミュニティ、介護)から一つ選び(複数選択も可)、その領域で実際に起こり



得る会話活動に関連したタスクに取り組み、テストと自然な会話を展開します。その後、テストは、ルーブリック表に基づいて、エクセル評価表を用いた評価作業を行い、その結果は自動的に算出され、5レベル(プラス、3つの下位区分)からなるレベル判定(評定値)とテスト結果に対する形成的コメントが受験者に知らされます。本章ではこの一連のプロセスの核である、そもそも JOPT が捉える口頭能力とは何なのか、そして、それはどのように測定し、評価、評定を行うのかという基本的なテーマについて説明します。

1.1 JOPT で捉える口頭能力とは

ことばが伝達の道具であることは誰も認めることでしょう。そして、どんな道具も、例えば、時計が時を知らせるという目的を果たすため、針や歯車などのパーツが使われるように、ことばも伝達上の目的(例えば、「自己紹介」)のため、名詞(「私」「太郎」)や助詞(「は」)など文法的な手段を用います。時計の質がいかに時を正確に刻めるかで判断されるように、ことばの運用能力も伝達上の目的がどのくらい果たせるかによって判断されます。JOPT が目指す日本語の口頭能力測定も **口頭面の伝達能力** をターゲットにしています。そして、優れた時計が良いパーツからなるように、ことばの運用能力もそれを生み出す語彙、発音、文法など発話を作り出す言語要素から生まれます。ここでは、JOPT が対象とする口頭能力とは何か、それをどのように測り、そして、どのようにレベル分けするかについて述べます。日本語が「できる」とは、「機能的言語能力」とは、「レベル判定」はどのように、という外国語教育の根本的な問題について改めて考え直す機会にもなるでしょう。



1.2 口頭能力を構成する要素: ことばの機能的な側面と形式的な側面について

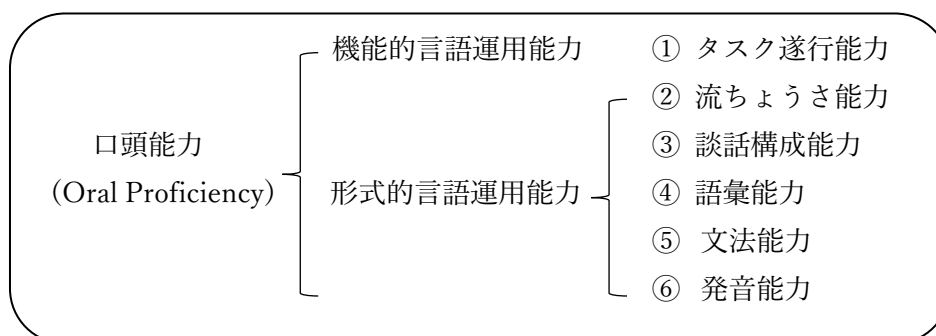


言うまでもなく、JOPT は日本語の口頭能力を測定するテストです。時計の質が時刻の正しく時間を表示することであるように、日本語の口頭能力も日本語を道具とした伝達行為(コミュニケーション行為)がどれほど行えるかによって判別されます。時計は時とし

て、装飾品となり、それによって価格が決められることがあっても、それが本質ではありません。同様に、日本語の口頭能力の評価においても、表面的な言語形式（文法的知識など）に目を奪われれば、誤った言語評価をしてしまうことになります。JOPT は日本語を道具として「どのような会話活動が、どれほど、そして、どのように、達成できるか」という点に焦点を当てた運用能力の判定を行います。私たちの生活はさまざまな言語活動（「言語行動」とも言う）から成り立っており、そのために話したり、書いたりします。ことばを使うために言語活動を行うではありません。ことばの練習のための活動は、いわゆる会話練習となり、それは JOPT の口頭能力測定の直接の対象ではありません。

JOPT は現実生活における純粋にコミュニケーションを目的とした活動を観察し、どのようなレベルの会話活動がどれほど、そして、どのように達成できるかを問うわけです。そのため、テストは受験者が現実生活において遭遇する可能性のある課題（「タスク」とも言います）を与え、それをどれほど、どのように達成できるかを見ます。このような観点に立つと、受験者は「日本語学習者」に違いはありませんが、むしろ、「日本語使用者」とみなされます。実際、JOPT では、受験者がどれほど、また、どのように日本語を学習したかは問いません。受験の時点で、日本語を使った会話活動がどれほど行えるか、日本語使用者としてのより本物の力、つまり、「実力」を測ることを目的としています。

専門用語を用いると、現実の生活において起こりうる会話活動（課題/タスク）を遂行する能力を「機能的言語運用能力（タスク遂行能力）」と呼びます。「自己紹介」「道案内」「料理の作り方の説明」「社会問題に対する意見述べ」など様々なタスクをこなしていく能力のことです。そして、これらのタスクを「どのように語るか」という点は「形式的言語運用能力」と呼びます。それは短い語彙や単純な文による発話から、段落を成す複雑な発話までを表す能力を意味します。JOPT は口頭能力とは、これらの二つの大きい要素、機能的、および、形式的言語運用能力からなると考えます。さらに、機能的言語運用能力を①タスク遂行能力と称し、形式的言語運用能力は②流ちょうさ、③談話構成、④語彙、⑤文法、⑥発音の5要素、合計6つの能力要素で構成されるものとし、これらを「評価」の対象とします。個別の評価が終わると、それらを統合し、テスト結果を総合的にレベル判定する「評定」結果を受験者に知らせます。



<図1：JOPT が捉える口頭能力の構成概念>

形式的言語運用能力の構成要素である②流ちょうさは会話の流れに沿って発話を続けていく能力に関わります。口頭能力の高い話者はすらすらと話せるでしょうが、語彙や文法の定着が弱い話者は、一つ一つ語彙や文法規則を思い出しながら話さざるを得ず、聞き手に大きな負担を与えたりします。ただ、誰でも丸暗記した表現などは流れるように発することができるでしょうが、だからといって流ちょうだとは限らないので、注意が必要です。ことばに詰まることは自然な会話に不可避であり、流ちょうさとは、むしろ、話を続ける上で生じる「障害」にうまく対応し乗り越えていく能力とも言えるでしょう。③談話構成能力は個々の発話を内容的にも、また、形式的にもうまく結びつけ、発話全体に「内容的なまとまり」（一貫性）と「形式的な結びつき」（結束性）を構成する能力を示します。原因と結果など話の前後関係にまとまりを生むことや、そのために、適切な接続詞を選んだり、あるいは、不要な繰り返しを避けたりして、発話全体を適切に結びつける能力を意味します。語彙能力、文法能力、発音能力はそれぞれ、文字通り、受験者の発話における語彙、文法、発音的側面を構成する能力を示します。④語彙能力はいわゆる単語、複合語、外来語など様々な語彙的要素を言語化する能力を含みます。⑤文法能力は語順、活用、アスペクト¹など発話を形作る上での多くの文法操作に関わる能力を示します。⑥発音能力は清音、濁音、強弱、高低、イントネーションなどことばを音声化する上での操作を含みます。流ちょうさ能力と談話構成能力と一連の発話の全体的構成に関わる能力を示すのに対し、語彙能力、文法能力、発音能力は発話の個別的側面に関連した能力を示します。

このように JOPT は口頭能力を「日本語を使って現実生活上の口頭面における言語活動を達成する能力」と規定し、その運用能力（プロフィールシエンシー）を測定します。したがって、JOPT とは、「日本語の口頭運用能力値を測るテスト」ということになります。JOPT にとって「現実生活上の口頭面における言語活動」という概念は、大変重要で、総合的言語運用能力値、つまり、プロフィールシエンシーのレベル分け（5 レベル）もそれがどれほど達成できるかという観点においてなされます。さらに、JOPT では「現実の生活」として4つの領域、つまり、アカデミック領域（JOPT-A）、ビジネス領域（JOPT-B）、コミュニティ領域（JOPT-C）、介護領域（JOPT-K）を取り上げ、そこで実際に観察される生活場面の会話活動をインタビューのタスクとします。今後、開発が進めば、さらに領域が広がることも期待されます。



2. JOPT による口頭能力の測定法と評価基準：インタビューによる発話サンプルの採集とその評価

¹ ものごとがどのような状態（完了した状態、進行中など）であるかを示す文法用語

繰り返し述べますが、JOPTは受験者（日本語使用者）が選択した領域において現実の会話活動をどれほど達成できるかをできる限り明確に示すことを目的としています。しかし、受験者を実際の会話場面に連れていき、そこで、どんな活動がどれほど遂行できるか調べることは事実上不可能です。したがって、テストと受験者が対面し、現実の生活場面で起こりうる活動をタスクとして与え、そこから生の発話を採集、評価し、その受験者の口頭能力を測る手段を取ります。このようなJOPTによるインタビューは次のような形式と特徴を持っています。

2.1 JOPTによるインタビューの形式と特徴

- ① 実施時間を約15分とする対面型（オンラインも可能）の会話である。
- ② 統一したタスク（課題）を与え、テスト間で生じがちなタスクの難易度や評価の誤差を最小限にとどめ、公平性を確保する。
- ③ 現実の会話活動を反映したタスクを与え、受験者から自然な発話を引き出す。
- ④ プロンプトと呼ばれるイラストやグラフを使い、受験者から自然な発話が引き出せるようにする。
- ⑤ アカデミック領域では、教室など多数の聴衆を前にした発表（プレゼンテーション）能力を測定するため、「プレゼンテーションタスク」を与える。
- ⑥ ビジネス領域、コミュニティ領域、介護領域では、対人関係に注意の必要な現実の生活場面を提示し、ロールプレイでその対応・処理能力を測る。



A 領域問題(アカデミック)



B 領域問題(ビジネス)



インタビューの流れは、後ほど3章で詳しく説明しますが、ここでは、インタビューで得られた発話サンプルをどう評価し、その総合結果をどう示すか（つまり、どう評定するか）についてその基本となる考え方について述べます。

2.2 評価基準について：現実世界の会話活動とルーブリック表による数値化

どんなテストでも何らかの目的を持って実施され、テストのためのテスト作りということは通常考えられません。大学入試用の模擬テストでさえ、本番の入試に備えて受験し、その結果を志望校に合格できるかどうかのヒントにするわけです。同様に、口頭能力テストであるJOPTの目的は、受験者が選択した領域においてどれほどの会話活動を行えるかを推測するものです。例えば、高等教育機関（大学等）では、何らかの社会現象などにつ

いて語り、意見を述べる能力が要求されます（上例、A—アカデミック「環境問題」参照）。ビジネスの世界では、勤務先で扱う新商品について説明する能力も要求されるでしょう（上例、B—ビジネス「新製品の売り込み」参照）。JOPTではそれらの言語活動を行う能力を「**機能的言語運用能力**」と呼び、インタビューにおいて収集した発話サンプルを通して口頭面においてどの程度の能力を発揮したか判断します。また、そのような活動が「どのように」達成できたかを見るため、「**形式的言語運用能力**」を調べます。いわゆる、どのような表現で達成できたかを見るわけです。そのため、形式面を構成する「**流ちょうさ**」「**談話構成**」「**語彙**」「**文法**」「**発音**」の5つの要素について細かく観察し、評価を下します。この作業をしやすくするため、次に示すルーブリック表という「物差し」を使います。拡大版を巻末に載せましたので、併せてご参照ください。

表1：ルーブリック表による能力評価基準（巻末にフルページ版添付）

評価点	機能的	形式的					
		①タスク達成度	②流ちょうさ	③談話構成	④語彙	⑤文法	⑥発音
5		<input type="checkbox"/> 課題について、自力で対応できていますので、他者からの助けはほとんど必要ありません。	<input type="checkbox"/> スタスタと話し、コミュニケーション上支障をきたす流ちょうさの問題は見られません。	<input type="checkbox"/> 話にまとまりがあり、つながりもよく、非常に分かりやすいです。	<input type="checkbox"/> コミュニケーションを進めるための語彙や表現がうまく使えています。	<input type="checkbox"/> コミュニケーションを進めるための文法がうまく使えています。	<input type="checkbox"/> コミュニケーションを進める上で発音やイントネーションの分かりにくさや不自然さは見られません。
4		<input type="checkbox"/> 課題について、ほとんど自力で対応できていますが、ある程度他者からの助けが必要です。	<input type="checkbox"/> なまに言葉に詰まりますが、コミュニケーション上支障をきたす流ちょうさの問題はほとんど見られません。	<input type="checkbox"/> 話にまとまりがあり、つながりもよく、分かりやすいです。	<input type="checkbox"/> コミュニケーションを進めるための語彙や表現がほとんどうまく使えています。	<input type="checkbox"/> コミュニケーションを進めるための文法がほとんどうまく使えています。	<input type="checkbox"/> コミュニケーションを進める上で発音やイントネーションの分かりにくさや不自然さはあまり見られません。
3		<input type="checkbox"/> 課題について、何とか自力で対応できていますが、かなり他者からの助けが必要です。	<input type="checkbox"/> ときどき言葉に詰まりますが、コミュニケーションはできています。	<input type="checkbox"/> 話にまとまりがなかったりつながりが分かりにくかったりしますが、おおよそ分かる話が出てきます。	<input type="checkbox"/> コミュニケーションを進めるための語彙や表現の問題がときどき見られます。	<input type="checkbox"/> コミュニケーションを進めるための文法の問題がときどき見られます。	<input type="checkbox"/> コミュニケーションを進める上で問題となる発音やイントネーションの分かりにくさや不自然さがときどき見られます。
2		<input type="checkbox"/> 課題について、応答が不十分で自力で対応するのは難しいです。他者からの助けがたくさん必要です。	<input type="checkbox"/> 言葉がしばしば途切れ、コミュニケーションが成り立ちません。	<input type="checkbox"/> 話にまとまりがなかったりつながりが分かりにくかったりすることがあります。	<input type="checkbox"/> コミュニケーションを進めるための語彙や表現の問題がよく見られます。	<input type="checkbox"/> コミュニケーションを進めるための文法の問題がよく見られます。	<input type="checkbox"/> コミュニケーションを進める上で問題となる発音やイントネーションの分かりにくさや不自然さがよく見られます。
1		<input type="checkbox"/> 課題について、達成するのが難しく、応答もほとんどできていません。他者からの助けがたくさんあっても、自力で対応するのはほとんど不可能です。	<input type="checkbox"/> 言葉が頻繁に途切れ、コミュニケーションの流れが止まっています。／滞っています。	<input type="checkbox"/> 話にまとまりがなかったりつながりが分かりにくかったりすることが多いです。	<input type="checkbox"/> 語彙や表現の問題が多く見られます。そのため、コミュニケーションがうまく進められていません。	<input type="checkbox"/> 文法の問題が多く見られます。そのため、コミュニケーションがうまく進められていません。	<input type="checkbox"/> 発音やイントネーションの問題が多く、コミュニケーションがうまく進められていません。

左端の項目「タスクの達成度」が「機能的言語運用能力」に、それ以外の項目が「形式的言語運用能力」に該当します。そして、5段階の3を全体的評価値の「**分岐点**」とします。この分岐点とは、「タスク達成度（機能的言語運用能力）」の場合、「**与えられたタスクが話者自身の力でなんとか達成できている点**」とし、一方、「**語彙**」「**文法**」など形式的言語運用能力の場合、「**コミュニケーション上の表現が整い、話者自身の伝えたいことが、聞き手にかなりの負担が生じるものの、一応、伝えられている点**」とします。会話は話し手と聞き手との**相互行為**によって成り立ちます。JOPTにおいては3を分岐点として、それ以上であれば、タスク的にも表現的にも話者自身の力でなんとか一応の目的が達せられるレベルにあるものと考えます。しかし、その分岐点においては、タスクの達成に聞き手からの「助け」はかなり必要で、2以下になると聞き手からの助けがあっても話し手自身の力ではタスクが達成できないことを意味します。一方、4、5と上がるにつれ

て、聞き手への依存（負担、協力）が減少し、話し手自身の力だけで活動を達成できることを示します。

評価の仕方については5章でより詳しく説明しますが、重要な点はJOPTにおける能力判定は「現実生活における口頭面の言語活動」の遂行能力に基準を置いていることです。そして、それらの活動がどれだけ話者自身の「自力」で、あるいは、他者に依存することなく遂行できるかという判断でレベルを決めます。つまり、当該の話者の「自立度」と聞き手への「依存度」の割合で決めます。自立度は肯定的な「できる」度合いにあたり、逆に依存度は「できない」度合いにあたるとも言えます。このようにJOPTがタスクの達成に重きを置いている点は、インタビューの後、受験者に知らせる最終結果にも反映されます。上述のように、評価は6つの要素についてなされますが、そのうち「タスク達成度」には他の要素より**3倍の重み付け**をします。それらの合計点を20%間隔でレベル分けし、JOPT 1、JOPT 2、JOPT 3、JOPT 4、JOPT 5の5段階による総合的な「評定」として受験者に知らせます。なお、「評価」「評定」など似通った用語が存在しますが、ルーブリック表に基づいた数値判断を「評価」とします。一方、「評定」は評価結果から得られる能力値に関わる、「具体的な解釈」を表します。次の表2において「得点」「(%)」は「評価」にあたり、「総合評価から推測できる当該場面でのプロフィシエンシー」が「評定」にあたります（詳細は、5章で説明します）。

表2： JOPT 総合評定：「自立度」と「依存度」に基づく総合評定と下位区分

レベル	得点	(%)	総合評価から推測できる当該場面でのプロフィシエンシー
JOPT 5	160~129	100~81	ほとんど自力でやっていけるため、他への依存は必要ない
JOPT 4	128~97	80~61	だいたい自力ではやっていけるが、ある程度の依存を必要とする
JOPT 3	96~65	60~41	なんとか自力ではやっていけるが、かなりの依存を必要とする
JOPT 2	64~33	40~21	かなりの依存が可能でも、自力でやっていくのは難しい
JOPT 1	32~0	20~0	どんなに依存が可能でも、ほとんど自力でやっていけない

レベル	得点	%	下位区分		下位区分 M		下位区分 L	
JOPT 5	160-129	100~81	JOPT5-H	160~151	JOPT5-M	150~140	JOPT5-L	139~129
JOPT 4	128~97	80~61	JOPT4-H	128~118	JOPT4-M	117~107	JOPT4-L	106~97
JOPT 3	96~65	60~41	JOPT3-H	96~86	JOPT3-M	85~75	JOPT3-L	74~65
JOPT 2	64~33	40~21	JOPT2-H	64~54	JOPT2-M	53~43	JOPT2-L	42~33
JOPT 1	32~0	20~0	JOPT1-H	32~22	JOPT1-M	21~10	JOPT1-L	9~0

最後に、このような言葉の運用能力（プロフィシェンシー）の考えに基づき、機能的言語運用能力と形式的言語運用能力（流ちょうさ、談話構成、語彙、文法、発音）を以下のように規定します。

● **機能的言語運用能力**

- ① **タスク遂行能力**：与えられた「タスク」をどれほど自力で、あるいは、他への依存を必要としないで果たせるかを示すもの。

● **形式的言語運用能力**

受験者の発話が、流ちょうさ、談話構成、語彙、文法、発音において、聞き手（テスター）にとってどれほど無理なく理解可能かを示すもの。受験者の能力が高ければ高いほど、聞き手には無理なく理解が可能で、「自立度」の高い発話となる。逆に、能力が低ければ低いほど、聞き手の理解に無理が生じ、「依存度」の高い発話となる。構成要素である「流ちょうさ」「談話構成」「語彙」「文法」「発音」が統合された結果として現れる。

- ② **流ちょうさ能力**：発話を適切な流れと滑らかさで進めていく能力の度合い
話を適切に展開させ、聞き手の理解を無理なく押し進める高いレベルから、話を適切に展開できず、聞き手の理解を非常に困難にする低いレベルまでである。
- ③ **談話構成能力**：発話全体の内容的なまとまりと形式的なつながりの度合い
内容のまとまり（一貫性）や表現上のつながり（結束性）があり、すんなりと理解される高いレベルから、言おうとすることが全く伝わらない低いレベルまでである。
- ④ **語彙能力**：語彙面における形式的言語運用能力の度合い
簡単で日常的、具体的な語句から、複雑で抽象度の高い語句など、与えられたタスクに適した語彙の選択に関する能力。
- ⑤ **文法能力**：文法面における形式的言語運用能力の度合い
語句の並べ方、語の活用、助詞、接続詞、時制、アスペクトの使い方などに関わる文法の適切な使用に関する能力。
- ⑥ **発音能力**：発音面における形式的言語運用能力の度合い
日本語に特徴的な促音（つまる音「っ」）、長音（「しゅうじん」vs「しゅじん」）、拗音（ねじれ音、きゃ、きゅ、きょなど）など発音の生成にかかわる能力。まったく誤解を生まないレベルから、母語や既習の言語の影響などから、日本語としては認識されず、ほとんど意味が通じないレベルまでである。

このように、現実の生活場面における言語活動を基盤にした「自立度」や「依存度」が JOPT における評価の中心的な概念になっています。「自立度」と「依存度」は相補的な関係にあります。話し手の自立度が高ければ高いほど、聞き手（対話の相手）は話し手の発話を容易に、負担なく、理解できるようになり、逆に、自立度が低ければ低いほど、聞き手は話し手の発話の理解に負担を感じるようになります。そのような考えに基づき、アカデミック、ビジネス、コミュニティ、介護の領域における能力規定が作成され、テストはそれに準拠して受験者から得られた発話サンプルを評価し、**総合的評定**を行います。

2.3 4領域の JOPT とそれぞれの能力規定：

アカデミック日本語口頭能力 (JOPT-A)、ビジネス日本語口頭能力 (JOPT-B)、
コミュニティ日本語口頭能力 (JOPT-C)、介護日本語口頭能力 (JOPT-K)

日本語を介してコミュニケーションを行う人達の多様性は増加する一方です。そのような背景のもと、JOPT はここに4つの領域を設定し、それぞれに特化した口頭能力の規定を行います。以下、それぞれの能力規定について述べます。

A) アカデミック日本語口頭能力 (JOPT-A)：

主として日本の高等教育機関への進学を目指す人々を対象に、アカデミックな世界で必要とされる口頭能力を測る。この領域における口頭能力とは、グラフなどを読み解いた上で、事実の説明、解釈、評価を述べ、学術的な規範・規則等に基づく根拠ある主張や議論ができる能力のことである。



B) ビジネス日本語口頭能力 (JOPT-B)：

主としてビジネスパーソン、及び、今後ビジネスの世界に入ろうとする人を対象に、その世界で必要とされる口頭能力を測る。この領域における口頭能力とは、提示されたイラストから場面や状況を理解し、職業人として社会的・文化的に相応しい日本語で表現ができ、さらに、ビジネス習慣を踏まえ、現在あるいは将来の展開を予測し、意見を述べたり提案したりできる能力のことである。



C) コミュニティ日本語口頭能力 (JOPT-C)：

主として定住者を対象に、コミュニティ（地域社会）の生活場面における口頭能力を測る。この領域における口頭能力とは、身近な生活場面のイラストを見ながら生活場面における人間関係に配慮し、そこで
の状況や事実関係、経緯などについてそれに相応しい日本語で描写・説明でき、さら



に、テーマに即した意見述べができる能力である。生活場面において人間関係に配慮した相応しい応答ができる能力も含む。

K) 介護日本語口頭能力 (JOPT-K) :

介護に従事している人、また介護の仕事に就く準備をしている人を対象に、介護分野で必要とされる口頭能力を測る。この領域における口頭能力とは、提示された介護場面のイラストを見ながら、状況や事実関係、経緯などについてそれに相応しい日本語で描写・説明、さらには伝達する能力である。また、介護場面において利用者への声掛けや、同僚や利用者との間で相応しいやり取りができる能力も含む。



第2部 JOPT の実施:テストの形式、インタビューの行い方、 発話データの評価・評定

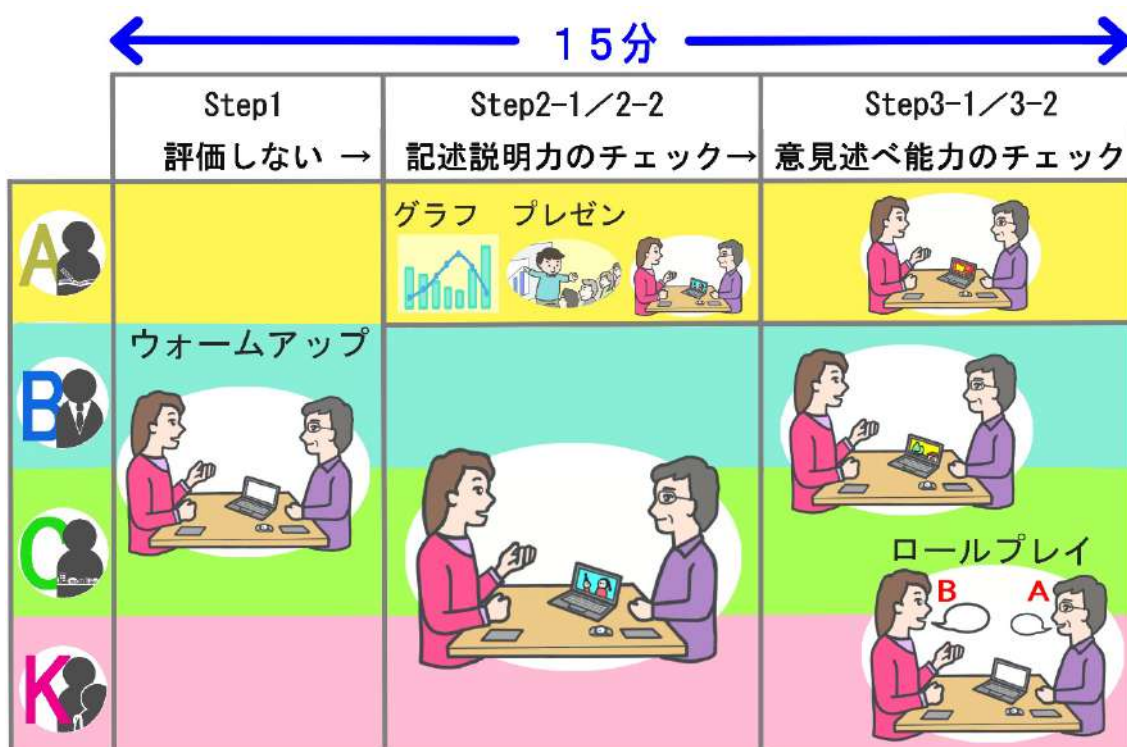
3. JOPT の構成:

Step 1 (ウォームアップ)、Step 2 (描写・記述など)、Step 3 (意見述べ)

JOPT は 15 分という短い時間とはいえ、対面式の会話において受験者にその範囲内で最大限の口頭能力を発揮させ、測定に必要な発話サンプルを必要かつ十分採集することを目指しています。また、日本語教師なら誰でも、また、日本語教育が専門でなくともそれぞれの現場に関わる方なら誰でもテストが行えるようデザインされています。インタビューは 3 つの段階からなり、受験者が選択した領域において実際に経験する言語活動に関する質問が与えられます。イラストやグラフを使って、自然な、また、迅速な対応を誘発しますが、それは、さまざまな理由によりテスト間で生じがちな発話サンプルの採集法や評価における大きなばらつきを極力少なくするためでもあります。インタビューの流れは次の通りであり、以下にその詳細を説明します。なお、A、B、C、K のインタビュー動画のサンプルを次のサイトにアップしています。ご参照ください。

https://jopt-team.org/?page_id=49。

<図2:JOPT の流れ>



JOPT はどの対象領域においてもこの流れで行われますが、内容はそれぞれの領域に特化したものになります。

Step 1 :

受験者に関する基本的な身辺情報（名前、居住地など）を得ると共に、インタビューをスムーズに進めるため心身共に落ち着かせるウォームアップが主たる目的です。そのため、この Step 1 は評価の対象にはしません。したがって、点数評価もなく、また、全ての質問をする必要もありません（名前は必ず必要です）。

Step 2 :

受験者が経験する可能性の高い場面を記したイラスト、あるいは、アカデミックな環境で使用されるグラフなど具体的なものごとについてそれがどういうものであるか客観的に述べることでできる能力を測ります。

Step 3 :

受験者が経験する可能性の高い場面を記したイラストに関する抽象的なものごとに関連しそれらの社会的意味などについて意見述べがでる能力を測ります。

なお、Step 1 は全ての領域において受験者自身に関する簡単な質問のセットが1つ、Step 2 と Step 3 では数項目の質問からなる課題を2セットずつ与えます。Step 2-1、Step 2-2、Step 3-1、Step 3-2 がそれらにあたります。また、JOPT-A（アカデミック）の Step 2 は口頭による発表力を調べるための課題「プレゼンテーション」を含みます。同様に、Step 3 も課題が2セット（Step 3-1、Step 3-2）、合計5セットの課題（タスク）からなります。また、JOPT-Aを除く3領域（B, C, K）にはロールプレイが課されます。次にJOPT-C（コミュニティ）を例に一連の課題例を紹介します。

JOPT-C（コミュニティ領域）を例に

Step 1 : ウォームアップが目的、評価はしない

1. お名前を教えてください。
2. 今、どこに住んでいますか。
3. いつからそこに住んでいますか。
4. ここから近いですか。
5. 今日はここまでどうやって来ましたか。
6. ここからどのくらいかかりますか。
7. いつも何時ごろ起きますか。
8. 朝起きて、まず何をしますか。
9. 朝ごはんは、いつも食べていますか。
10. 好きな食べ物は何ですか。



Step 2： 具体的なものごとについて述べる能力を測る (2セット)

C202「地震」について

0. 今住んでいるところはアパートですか。
1. イラストについて分かることを話してください。
2. 地震のとき、どうしたらいいか話してください。



JOPT-C Step 3： 抽象的なものごとについて意見述べができる能力 (2セット)

C301「日本語教室」について

0. 日本語教室に通ったことがありますか。
1. 地域の日本語教室は、無料ではなく参加費を払うべきだという意見があります。この意見に賛成か反対か、理由をあげて話してください。
2. 近くの日本語教室では、ボランティアさんがどんどん減って困っています。ボランティアさんを増やすために、どうしたらいいか話してください。
3. 【ロールプレイ】



日本語教室でお世話になっている方が、ポルトガル語（受験者の母語に合わせる）の原稿を書いたので見てほしいと頼んできました。丁寧に断ってください。

<参考>

テスター：あとう、〇〇さん、原稿を書いたんですが、見てもらえませんか。



他のどの領域も、同じ流れで進められますが、JOPT-A（アカデミック）のStep 2では多人数の聴衆を前提とした発表能力を測定するため「プレゼンテーション」を課します。また、JOPT-B（ビジネス）、JOPT-C（コミュニティ）とJOPT-K（介護）のStep 3では対人関係に配慮が必要な場面における口頭能力を測定するため上例のようなロールプレイも課されます。このようなタスクは口頭能力以上に「演技力」が試されるのではないかという問題が懸念されますが、この点は次章で取り上げます。

4. インタビューの行い方:効果的な発話サンプルの採集法

JOPTでは、人は落ち着いて、気持ちが安定している時にその人の会話能力をフルに発揮できるものと考えます。したがって、15分という短い時間ながらもテストはもちろん、受験者もしっかり落ち着き、気持ちを安定させ、会話を始めます。むしろ、15分という短い時間だからこそ、緊張をほぐし面接に取り組む必要があります。

4.1 実施場所の設定

JOPTはテストには違いありませんが、多人数の受験者を対象に一斉に、そして、厳粛に行う「試験」ではありません。また、入学や入社のための面接試験のような緊張を強いるものでもありません。むしろ、テストも受験者も落ち着いた気持ちで、自然な会話を展開することを目指しています。したがってインタビュー中メモを取る等、緊張感を高めるようなことを慎み、余計な雑音や急に他者が介入したりすることのない環境で行います。以下、必要備品やテスト実施時の注意点を箇条書きにします。

(1) 事前に用意するもの：問題セット、評価表、録音器材など

- ① JOPT運営サイトに連絡をし、テスト実施要項、課題セット、評価表（受験者情報が記載済み）の3点を受け取る。
- ② 受験者には、イラストのみ提示する（紙媒体の場合は、テスト後回収する）。
- ③ タブレット、あるいは、PCが二つあれば、一方を受験者用（イラストのみ）に、もう一方は、テストター用（イラスト+質問文+評価表）に使用する。
- ④ 受験者用のタブレットがない場合は、イラストを印刷し、それを受験者の目の前で示す。オンライン受験の場合、モニターには受験者のイラストのみ写し、テストターは別の機材で質問文を見てインタビューを進める。
- ⑤ 1領域15分までをめぐりにテストを実施する。複数の領域を受験した場合、それに応じた時間が必要になる。但し、Step 1は一度だけで良い。
- ⑥ 時間を示す機器をテストターの目の届くところに置き、スムーズにインタビューが進行するよう心がける。しかし、何度も時計を見るなど受験者に回答を急がせるような行為は慎む。

(2) テスターの心得：

- ① 受験者の発話がしっかり録音されることを確認して始める。テストターの発話しか聞けないことが往々にしてあるので注意が必要である。
- ② 受験者と気持ちよく話せる距離、適切な声の大きさを保つ。あいづちを打ちすぎない、メモを取らない等、気持ちの良い対応に留意する。

- ③ テレビのアナウンサーが話すような日本語を意識する必要はない。しかし、外国人を特別扱いした「フォリナートーク」と言われるような不自然なスピードの話し方や、必要以上の発話を加えるなど、受験者に無理な負担を与えない。
- ④ 日本語教育を専門にしないテスターや日本語を母語としないテスターも自信を持って対応する。日本語教育が専門でないとか、母語話者ではないことを表面化させることなく、落ち着いた態度で進めること。

(3) インタビュー環境：

静かに落ち着いてインタビューを行える場所なら、特別の場所を設定する必要はありません。しかし、次の点については、十分な注意が必要です。

- ① 次の「よくない例」にあるように、緊張感を強いるテーブル配置を避け、気持ちよく対面できるようにすること。
- ② 外部からの騒音、インタビューの途中で電話やドアのノックがないように張り紙などをすること。
- ③ 受験者にはインタビュー中に携帯電話に電話が入らないように依頼すること。テスター自身の携帯電話も同様の確認を行うこと。
- ④ 空調等の機械音がインタビュー中の支障にならないよう配慮すること。

<図3：インタビュー環境の良い例>



<図4：インタビュー環境の良くない例>



横柄な態度、乱暴な応対をする。受験者を緊張させる。

テストターが話しすぎる。受験者の話を最後まで聞かない。

PC や時間などを気にしすぎて、受験者の話をきちんと聞かない。

受験者が十分な発話ができるよう、テストターは必要最低限の発話にとどめる。

4.2 インタビューの進め方：JOPT-A（アカデミック領域）を例に

インタビューを開始する前に、必ず、「JOPT インタビューをはじめる前に」を読んでおいて下さい。JOPT-A（アカデミック）では、プレゼンテーションがあること、JOPT-B（ビジネス）、JOPT-C（コミュニティ）、JOPT-K（介護）ではロールプレイがあることを伝えておいて下さい。「対面」を前提とし、メモ、スマホ、辞書などは別の場所に置き、インタビューに集中するよう指示して下さい。Zoom などによる「オンライン」での受験も可能ですが、その場合、特にメモや辞書などを見ないで話すことを強調して下さい。ここでは対面による「JOPT-A」を例に具体的にインタビューの流れを説明しますが、他の領域も基本的には同じです。

1. <対面の場合>

「どうぞお座りください。インタビューは15分程度で終わりますので、慌てないで落ち着いて質問に答えてくださいね。」などと言って、テストターも受験者も落ち着いてスタートして下さい。また、Step 1 を始める前の注意として、次の事項をゆっくり伝えてください。

- ① インタビューは録音するので、特に声の小さい受験者には注意を促し、マイクを近づけるようにして下さい。
- ② テスターも受験者もインタビューに集中して話して下さい。話の途中でメモ

を取ったりしないでください。

- ③ インタビューの進行が邪魔されないよう、電話がならないことや、また、誰かがドアを叩くことなどないように注意をしてください。

<オンラインの場合>

「私の顔がよく見えますか。私の声がよく聞こえますか。インタビュー中は私の方をしっかりと見て、話してくださいね」などと言って和ませてから始めて下さい。録画すること、また、Wi-Fiの通信状況についても問題のないことも確認して下さい。

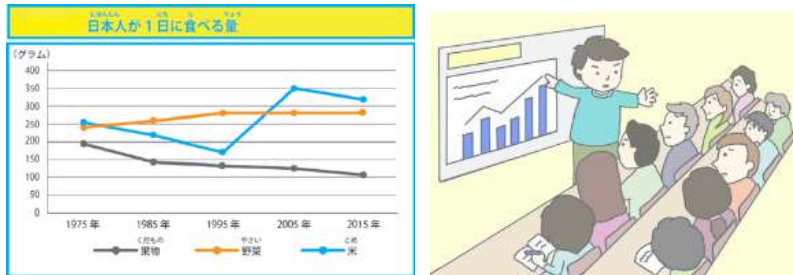
2. **《Step 1》**ここでの目的はウォームアップなので、評価をしません。質問と質問の間に、「あ、そうですか、では～」と言うなどつなぎを作り、自然な問いかけになるよう心がけて下さい。矢継ぎ早に質問をするのではなく、ゆっくり回答を確かめ、相槌を打つなどして、進めてください。

1. お名前は何ですか。
2. 今、学生ですか。
3. 日本語はいつから勉強していますか。
4. 日本語はむずかしいですか。
5. 日本の大学でどんなことを勉強したいですか。
6. 日本語のテレビは観ますか。(※日本語の使用環境について知る)
7. 日本語の新聞は読みますか。(同上)
8. 日本語で友達にメールや手紙を書くことはありますか。(同上)
9. 日本語で大勢の前で話したことがありますか。(同上)
10. 大学を卒業してからどんなことをしたいと思っていますか。



3. 「はい、ありがとうございます。それでは、次に移ります」と言って受験者が落ち着いていることを確かめ、ウォームアップを終える。「ウォームアップはここまでです」などの言い方は避けてください。
4. 「では、これから **Step 2** の課題です。まずはグラフを使って質問をします。いいですか、○○グラフのイラストを見てください。」

Step 2-1 「日本人が1日に食べる量」



0. これは何のグラフですか。
1. このグラフが示していること、表していることは何ですか。わかることを何でも話してください。
2. これからプレゼンテーションをしてください。聞いている人は、30人の学生です。このグラフが示していること、表していることについて話してください。右のイラストのような状況だと思ってください。時間は1分です。

Step 2 は異なるイラストによるもう1セットの課題があるので、「次のイラスト (Step 2-2) を見てください」と言って先に進めてください。

5. Step 2 の二つ目の問題セットが終わると、「では、次に移ります。」と告げて **Step 3** に進んでください。

Step 3-1 「就職問題」



0. 将来日本で働きたいですか。
1. 国によっては大学や大学院を卒業しても就職が難しいです。どうしてだと思いますか。
2. 大学や大学院を卒業しても就職できない人が多くなると、社会にどんな問題が出てきますか。
3. 大学や大学院を卒業しても就職できない人がいます。この問題を解決するためにどうしたらいいですか。

- Step 3 が終われば、最後に「はい、これで JOPT の会話テストは終わりです。お疲れさまでした。」と言って終了する。

4.3 JOPT-B (ビジネス)、JOPT-C (コミュニティ)、JOPT-K (介護) における ロールプレイの実施について

JOPT-B、JOPT-C、JOPT-K の Step 3 ではロールプレイが課されます。例えば、15 ページで取り上げた JOPT-C の課題では、下記のような設定でテストが「日本語教室でお世話になっている方」になり、受験者に原稿のチェックを依頼する場面になっています。その際大切なことは次の点です。

- ① 受験者が場面、課題、役割を理解していることをしっかり確認してから、ロールプレイを始めて下さい。これらを誤解してロールプレイを始めると、受験者の本当の能力が判定できなくなるので、十分注意して行ってください。
- ② 必要以上に誇張して演じなくてかまいませんが、同時に、例文をただ読むような話し方は慎んでください。できるだけ自然な態度で受験者の相手の役になってください。
- ③ 受験者にしっかり話させるのが目的なので、テストが必要以上に話しすぎないようにしてください。
- ④ 限られた時間で行うロールプレイなので、時間の管理が大切になります。

【ロールプレイ】(例)

日本語教室でお世話になっている方が、ポルトガル語（受験者の母語に合わせる）の手紙を書いたので見てほしいと頼んできましたが、丁寧に断ってください。

<参考>

テスト：あ、う、〇〇さん、ポルトガル語で手紙を書いたんですが、ちょっと直してもらえませんか。

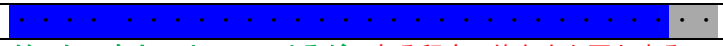
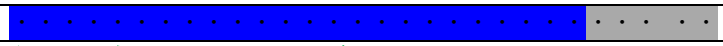
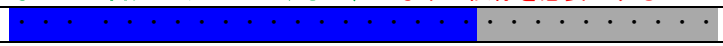


なお、インタビュー中に生じる問題に対する対処法については、巻末の「JOPT 実施中の対応 TIPS」がありますので、参照してください。

5. 発話サンプルの評価と評定

JOPT の最終目的は、言うまでもなく、日本語使用者としての受験者が当該の領域でどれほど口頭面の言語活動を行えるかを測ることです。9 ページでも述べましたが、インタビューでは受験者から発話サンプルを集め、それを機能的言語運用能力（タスク遂行能力）と形式的言語運用能力（流ちょうさ、談話構成、語彙、文法、発音）の観点から「評価」し、数値化します。最後に、その数値は、当該の領域における能力を具体化した形で表されます。そのような作業を「評定」と言います。ある人が 100 メートルを 10 秒で走るとすると、その人は「すごく早く走る人！」「オリンピックレベルの速さ！」「最上級！」などという「評定」がなされます。しかし、それが鳥のはやぶさのものだとするとどうでしょう。それには、また別の評定（「鳥にしては遅い」「鶏レベル」など）がなされるでしょう。JOPT は全ての領域に JOPT 1 から JOPT 5 までのレベル分けによる評定を行います。そして、それぞれのレベルが具体的に何を意味するかはそれぞれの領域の能力規定に記されています。いわゆる、Can-Do Statement（「～ができる」という記述）としてまとめられます。

JOPT 1 から JOPT 5 までのレベル分けは、2.2 で取り上げたように日本語話者の「自立度」「依存度」という概念を使ってなされ、それが受験者に「総合評定」として示されます。

表 3：「自立度」「依存度」をもとにした階層的総合評定：JOPT 1～JOPT 5

レベル	得点	(%)	総合評価から推測できる当該場面でのプロフィシエンシー
JOPT 5	160~129	100~81	ほとんど自力でやっつけられるため、他への依存は必要ない 
JOPT 4	128~97	80~61	だいたい自力でやっつけられるが、ある程度の依存を必要とする 
JOPT 3	96~65	60~41	なんとか自力でやっつけられるが、かなりの依存を必要とする 
JOPT 2	64~33	40~21	かなりの依存が可能でも、自力でやっつけいくのは難しい 
JOPT 1	32~00	20~00	どんなに依存が可能でも、ほとんど自力でやっつけられない 

この総合評定表は受験者に受験後のフィードバックとともに受験結果として配信するため、「自立」を「自力」という分かりやすい表現に変えています。また、口頭能力のポジティブな面を強調するため、「自力で～できるが、他への依存は・・・」という書き方になっています。このマニュアルの最終章であり、また、JOPT にとってもっとも大切な作業の一つである評価、評定をどのように行うのか、どうすれば、より信頼性の高い結果を導いていけるのかについて説明するのが本章の目的です。

5.1 JOPT による評価と評定：項目毎の点数配分と総合評定点

JOPT は1領域約15分の課題をインタビューにて録音し、インタビュー終了後録音データを再度聞きなおし、評価を行います。評価にはルーブリック表(p.6表1)を参照しながら次の評価・評価シート(表4)に評価点を入力すれば、後は自動的に評価項目毎の点数換算が行われ、最後に総合点とそれをJOPT 1~5へレベル化する評定作業が終了します。表5は受験者に知らせるテスト結果とフィードバックを記したものです。

表4：評価・評価シート 1

		Step2-1					Step2-2					Step3-1					Step3-2					合計					
領域	番号	受験者名	タスク	流暢	談話	語彙	文法	発音	タスク	流暢	談話	語彙	文法	発音	タスク	流暢	談話	語彙	文法	発音	タスク	流暢	談話	語彙	文法	発音	
x	1	〇〇さん	4	3	3	4	3	5	3	4	3	3	4	5	4	3	4	4	3	4	3	3	2	4	3	5	86

(注意事項)
各ステップの評価値は、見本の「Aさん」の評価値のところに上書きしてください。フィードバックシートの「JOPT評価」の下位分類のH、M、Lは、ご自分で記入ください。また、受験者1名につき、1ファイルをお帰し下さい。

ここでの合計点はタスクの重み付け(他の3倍)をしていない素点です。

評価点	機軸面	形式面					
		①タスク達成度	②流ちょうさ	③談話構成	④語彙	⑤文法	⑥発音
5		課題について、自力で対応できていますので、他者からの助けはほとんど必要ありません。	□スラスラと話し、コミュニケーション上支障をきたさぬ流ちょうさの問題は見られません。	□話にまとまりがあり、つながりもよく、非常に分かりやすいです。	□コミュニケーションを進めるための語彙や表現がうまく使えています。	□コミュニケーションを進めるための文法がうまく使えています。	□コミュニケーションを進める上で発音やイントネーションに分かりにくさや不自然さは見られません。
4		課題について、ほとんど自力で対応できていますが、ある程度他者からの助けが必要です。	□たまに言葉に詰まりますが、コミュニケーション上支障をきたさぬ流ちょうさの問題はほとんど見られません。	□話にまとまりがあり、つながりもよく、分かりやすいです。	□コミュニケーションを進めるための語彙や表現がほとんどうまく使えています。	□コミュニケーションを進めるための文法がほとんどうまく使えています。	□コミュニケーションを進める上で発音やイントネーションに分かりにくさや不自然さはあまり見られません。
3		課題について、何とか自力で対応できていますが、かなり他者からの助けが必要です。	□ときどき言葉に詰まりますが、コミュニケーションはできています。	□話にまとまりがなかったりつながりが分かりにくかったりしますが、おおよそ分かる話が出てきます。	□コミュニケーションを進めるための語彙や表現の問題がときどき見られます。	□コミュニケーションを進めるための文法の問題がときどき見られます。	□コミュニケーションを進める上で問題となる発音やイントネーションの分かりにくさや不自然さがときどき見られます。
2		課題について、応答が不十分で自力で対応するのは難しいです。他者からの助けがたくさん必要です。	□言葉がしばしば途切れ、コミュニケーションが成り立ちません。	□話にまとまりがなかったりつながりが分かりにくかったりすることがあります。	□コミュニケーションを進めるための語彙や表現の問題がよく見られます。	□コミュニケーションを進めるための文法の問題がよく見られます。	□コミュニケーションを進める上で問題となる発音やイントネーションの分かりにくさや不自然さがよく見られます。
1		課題について、達成するのが難しく、応答もほとんどできていません。他者からの助けがたくさんあっても、自力で対応するのはほとんど不可能です。	□言葉が頻繁に途切れ、コミュニケーションの流れが止まっています。／滞っています。	□話にまとまりがなかったりつながりが分かりにくかったりすることが多いです。	□語彙や表現の問題が多く見られます。そのため、コミュニケーションがうまく進められていません。	□文法の問題が多く見られます。そのため、コミュニケーションがうまく進められていません。	□発音やイントネーションの問題が多く、コミュニケーションがうまく進められていません。

表5：JOPT フィードバックシート

JOPTフィードバックシート		タスクの達成度	流ちょうさ	談話構成	語彙	文法	発音	総合得点
受験者の氏名	Aさん	Step2-1	5	5	5	5	4	
JOPTレベル	JOPT5	Step2-2	5	5	5	5	5	
JOPT得点(%)	132点 (82.5%)	Step3-1	4	4	4	4	4	
コメント	ほとんど自力でやっているため、他への依存は少ない	Step3-2	1	2	3	4	5	132
備考(自由記述欄)		平均得点	3.75	4	4.25	4.5	4.5	4.8
		偏差	0	0	0	0	0	0

JOPT評価 [JOPT -]

※サンプルのAさん(LJOPT5)と一致します。

レベル	得点範囲	%	下位分類	下位分類 M	下位分類 L
JOPT5	180-128	100-81	JOPT5-H	180-131	JOPT5-M
JOPT4	128-97	80-61	JOPT4-H	128-133	JOPT4-M
JOPT3	95-65	60-41	JOPT3-H	95-98	JOPT3-M
JOPT2	64-33	40-21	JOPT2-H	64-51	JOPT2-M
JOPT1	32-0	20-0	JOPT1-H	32-32	JOPT1-M

得点範囲	コメント	JOPTレベル
0	どんなに練習が得意でも、ほとんど自力でやっていけない	JOPT1
33	かなりの練習が得意でも、自立してやっていくのは難しい	JOPT2
65	概と自力でやっていけるが、かなりの練習を必要とする	JOPT3
97	だいたい自力でやっていけるが、ある程度の練習は必要	JOPT4
129	ほとんど自力でやっていけるため、他への依存は少ない	JOPT5

JOPT は、実際の言語活動、つまり、機能的言語運用能力（タスク遂行能力）に重きをおいた総合点 160 点からなるテストです。したがって、テストの総合評定（レベル分け）の算出についても、①タスク達成度に他の要素（②流ちょうさ、③談話構成、④語彙、⑤文法、⑥発音、各 1 点ずつ、合計 5 点）の 3 倍に重みづけして総合点に組み入れます。つまり、一つの課題は①タスク達成度（機能的言語運用能力）の満点 15（5 x 3）、形式的言語運用能力の満点 25（5 x 5）、合計 40 点となります。前述のようにそれぞれの問題の Step 1 は評価しませんが、Step 2 と Step 3 は評価対象となり、それぞれ 2 セットずつ、計 4 セット、総合点 160 点（80 x 2）となります。それを「自立度」「依存度」という概念をもとに階層的レベルに分けたものが表 2 「総合評定：JOPT 1 ～ JOPT 5」になります。

● JOPT の点数配分

STEP	機能的言語運用能力		形式的言語運用能力				計
	①タスク達成度	②流ちょうさ	③談話構成	④語彙	⑤文法	⑥発音	
1	—	—	—	—	—	—	—
2-1	15	5	5	5	5	5	40
2-2	15	5	5	5	5	5	40
3-1	15	5	5	5	5	5	40
3-2	15	5	5	5	5	5	40
計	60	20	20	20	20	20	160
重みづけ	x3	x1	x1	x1	x1	x1	

● 総合評定「JOPT 1～5」とそれらの下位区分

レベル	得点	%	下位区分		下位区分 M		下位区分 L	
JOPT 5	160-129	100~81	JOPT5-H	160~151	JOPT5-M	150~140	JOPT5-L	139~129
JOPT 4	128~97	80~61	JOPT4-H	128~118	JOPT4-M	117~107	JOPT4-L	106~97
JOPT 3	96~65	60~41	JOPT3-H	96~86	JOPT3-M	85~75	JOPT3-L	74~65
JOPT 2	64~33	40~21	JOPT2-H	64~54	JOPT2-M	53~43	JOPT2-L	42~33
JOPT 1	32~0	20~0	JOPT1-H	32~22	JOPT1-M	21~10	JOPT1-L	9~0

このように評価システムの操作自体は非常に簡単ですが、評価そのものの判断は決してやさしくありません。ルーブリックは、主観的な判断になりがちなパフォーマンスの評価において、テスト間での誤差を少なくすることを目的に考えられたものです。JOPT における評価基準の設定の仕方については、すでに 2.2 にて詳しく述べましたが、ここで改めて重要な点をまとめておきます。

(1) JOPT は口頭能力を「日本語を使って現実生活上の口頭面の言語活動を達成する能力」

と規定し、その運用能力（プロフィシエンシー）を評価する。

- (2) 口頭能力（Oral Proficiency）は「機能的言語運用能力」と「形式的言語運用能力」の2面から測定、評価し、それを総合的に評定する
- (3) タスクの達成度は言語使用者としての「自立度」と「依存度」でレベル分けできる。
- (4) 「依存が必要なものの、なんとか自立して会話活動が行える」レベルを分岐点とし、それ以下の話者は、ほとんど自立できない、それ以上の話者はかなり自立できるレベルとみなす。JOPTは5段階レベルを設定し、この分岐点をJOPT 3とする。

このように「自立度」や「依存度」の概念は非常にわかりやすいと思いますが、その程度を見定めるのはそれほど簡単ではありません。それについて、次節で、具体的な発話例を挙げて説明をしますが、その前に、もう一度、評価の基盤となる「機能的言語運用能力」「形式的言語運用能力」が意味するところを「自立度」「依存度」の観点から確認しておきます。

● 機能的言語運用能力（タスク遂行能力）

与えられた「タスク」をどれほど自力で、あるいは、他への依存を必要としないで果たせるかを示すもの。

● 形式的言語運用能力

受験者の発話が、流ちょうさ、談話構成、語彙、文法、発音において、聞き手（テスター）にとってどれほど無理なく理解可能なものかを示す。受験者の能力が高ければ高いほど、聞き手に無理なく理解が可能で、「自立度」の高い発話となる。逆に、能力が低ければ低いほど、聞き手の理解に無理が生じ、「依存度」の高い発話となる。構成要素である「流ちょうさ」「談話構成」「語彙」「文法」「発音」が統合された結果として現れる。

● 評価項目の定義と評価上の注意点

① タスクの達成度：

与えられたタスク（課題・・・質問、ロールプレイ、プレゼンテーション）の総合的なでき具合を示します。

② 流ちょうさ：

発話の流れを示します。JOPTは話し言葉を対象にしているため、受験者は話す内容を考えながら話さなければなりません。そのため、スラスラと流れるように話せることだけで流ちょうさが高いとは言えません。また、習い覚えたことを一気に暗唱してもそれで流ちょうさがあるとも言えません。むしろ、スピードが落ちてもその時間をうまく利用して発話を続けていけるかという点に注意が必要です。

③ 談話構成：

談話とはタスクを達成する際に発せられる発話全体を意味し、その全体的な構成のあり方を示します。話していることに内容的なまとまりがあり、一貫した談話になっているか、また、話の前後に適切な繋ぎの手段（例えば、接続詞の使用）が取られ、全体的に順序立った繋がりのある談話になっているかを示します。

④ 語彙：

タスクを達成するために必要な語彙。つまり、語、語句の言語表現がどのように使っているかを示します。

⑤ 文法：

活用、語順、時制、アスペクトなど発話を意味あるものとして整える規則。しかし、語彙同様、自然な話し言葉を成り立たせるための規則であり、助詞の「省略/不使用」など書き言葉とは異なる点があるので、注意が必要です。ここでいう「文」「文章」はあくまで口語的なものであり、書き言葉に特徴的な「～だ/である」など、いわゆる終止符「。」を明瞭にさせる述べ方は要求されません。

⑥ 発音：

発話に用いられる語彙や語句の清濁、高低、長短などを示します。日本語に特徴的な拗音（キャ、キュ、キョなど）、促音（詰まる音、小さい「っ」）、撥音（「ん」）などにも注意が必要です。

5.2 評価の方法：

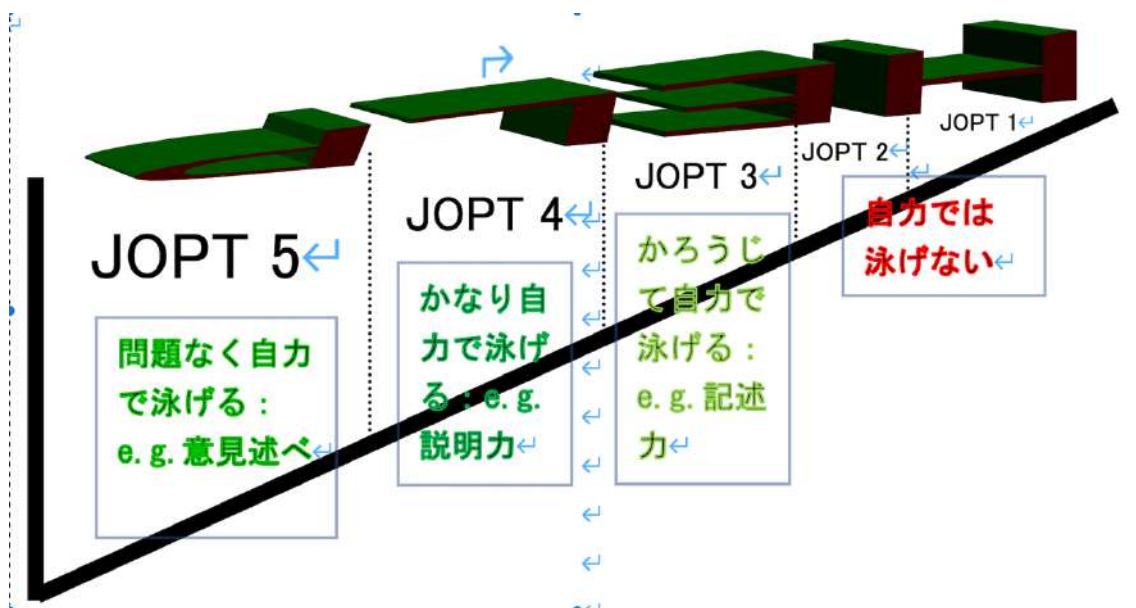
● 基本的な考え方

- (1) 「～ができる」という「肯定的判断（＝自立度）」と「～ができない」という「否定的判断（＝依存度）」の両面からタスクの遂行レベル（出来具合）を決定します。
- (2) 「できる（自立）/できない（依存）」とその「程度」の判断手順：大枠を3とした場合
 - ① 大枠を決める：3（だいたい対応できる、だいたい自分の力で達成できている）
 - ② 4（少しは他者の力を必要とするが、ほぼ、自分の力で達成できる）と比較し、その結果、4には達しないと判断。
 - ③ 2（自分の力で達成するのは難しい）と比較し、その結果、2は十分達成していると判断。
 - ④ 以上から、この受験者の「タスク達成度」は3と決定づける。

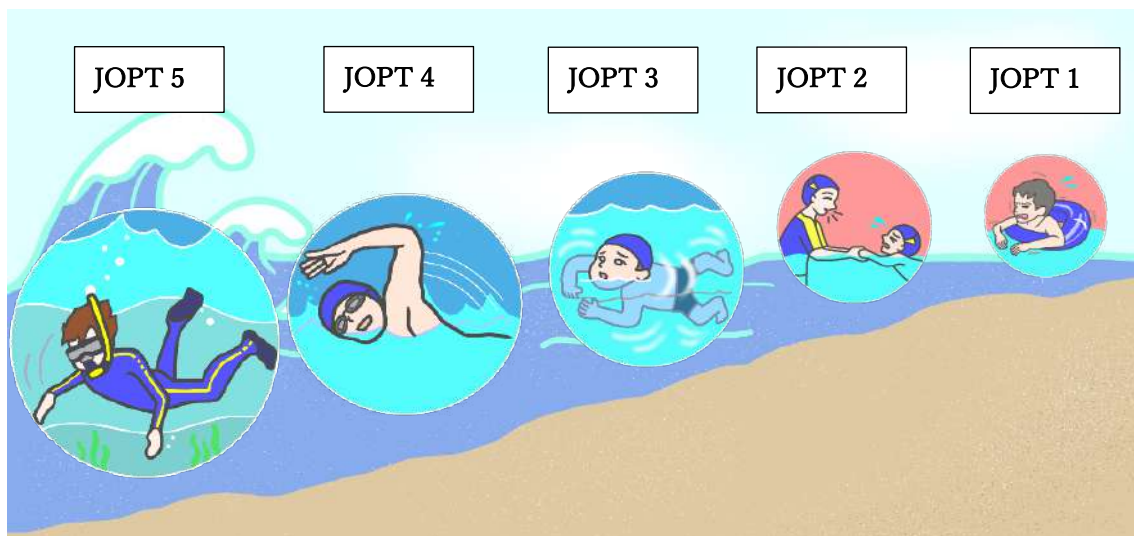
次に示す二つの図は鎌田・嶋田・三浦（2020: 51 など）で使用した「言語活動のプール」を編集したのですが、ここでは、私たちの生活が様々な難易度からなる会話の活動から

成り立っていることを示しています。JOPT のスケールは、なんとか自力で会話を進めていける JOPT 3 を分岐点、つまり、「泳げる」というポイントに定め、それ以下の JOPT 2、JOPT 1 は「自力では泳げない」「浮き袋なしでは浮かぶこともできない」レベルを示します。一方、JOPT 4、JOPT 5 は「浮き袋など全く必要としない」だけでなく、「必要ならば他の人も引っ張っていける」ぐらいの自立力を持っていると考えられます。なお、水面上の文字は何でしょう。何に喩えることができるでしょう。考えてみてください。

●スイミングを例に (1)

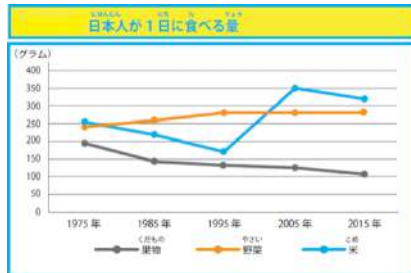


●スイミングを例に (2)



5.3 実際の発話例： 以下は、JOPT 運用サイトに挙げた実例動画から問題の一部を取り出したものです。 https://jopt-team.org/?page_id=49 を参照ください。

● JOPT-A (アカデミック) STEP 2-1



- 0. これは何についてのグラフですか。
- 1. このグラフが示していること、表していることは何ですか。わかることを何でも話してください。
- 2. 3. 略

● JOPT-B (ビジネス) STEP 3-2



- 0. 新製品の話を聞いて、つい買ってしまったことがありますか。
- 1. ある会社では、売れ残った商品を社員が買わなければなりません。これについてどう思いますか。理由も話してください。
(2以下、略)

● JOPT-C (コミュニティ) STEP 3-2



- 0. ゴミ出しはいつも誰がしますか。
- 1. ゴミの出し方はまちによって違います。細かく分別するやり方に賛成か反対か理由をあげて話してください。(中略)
- 2. どのような工夫が考えられる？ (3、略)

● JOPT-K (介護) STEP 2-1



- 0. 食事介助(お手伝い)をしたことがありますか。
- 1. イラストについてわかることを話してください。
- 2. 食事の手伝いをするとき、どんなことに気をつけたらいいですか。(3、略)

5.4 その他注意事項：

(1) Step 1 の評価について

このテストの導入部、ウォームアップの段階にあり、ここで得られた発話データは評価の対象にはなりません。Step 1 はあくまで、導入、ウォームアップが目的なので、深入りしないで「あ、そうですか。わかりました」と言うなどして次の質問項目に進んでいってください。もう一点、注意すべきは、この Step 1 の発話だけで「早とちり」をしないようにしてください。特に、発音の良い受験者の場合、それだけで「すごい」と判断し、5をつけてしまいがちなので、注意が必要です。また、こなれた表現（例えば、「とんでもございません」など）をさらっと言う受験者の場合、それが単に暗記したものとして使う場合もあるので、惑わされないようにしてください。Step 1 はあくまでウォームアップが目的であることを念頭に置いてください。

(2) 機能面「①タスク達成度」の評価について

自力で出来たかどうかで判断してください。語彙、文法の間違いがあつた、発音が良くないなど形式面での問題を理由にして、評価を下げないでください。また、発話量が多いからといって、評価が高くなるわけではありません。また、JOPT は「聞く力」を測るテストではありません。問題が聞き取れない、勘違いをするといったことが生じた場合、テストターが「助け船」を出すこととなりますが、これに関しては、最小限の対応にしてください。詳しくは「Q&A」をご覧ください。

(3) 形式面「②流ちょうさ、③談話構成、④語彙、⑤文法、⑥発音」の評価について

*見きわめ方

ルーブリックを見て、評価をしてください。目安として、次のようなことを軸にすると、評価しやすいでしょう。

5 = 「おみごと！」と感じられるレベルです。

4 = 「おみごと！」とまでは言えないが、かなり良くできています。

3 = ときどき聞き手に負担が生じるものの、「形」にはなっています。

2 = たどたどしさがあつて、理解に困難が生じます。

1 = タスクが達成できていず「形」になっていません。

*減点の仕方

ダブルでマイナス評価を下さないでください。

例：語彙面と発音面の両方で減点しないでください。

* Step 2, Step 3 の中に 2 つまたは 3 つのタスクがあります。タスクの達成に関しては、個別に評価するのではなく、Step ごとのタスク全てをまとめて、総合的に判断してください。

* 該当する Step のレベルをはるかに越えた、あるいは、はるかに落ちる表現（語彙など）が突発的に使われたからといって、それだけで評価を上げ下げしないでください。

例：JOPT-C (Step 2-2) 「護身」「非常袋」「身を守る」等

* 発音上の問題を語彙面でマイナスにしないでください。

例：「環境」を「かんきゅう」として発音したが、その意味を理解して使っている場合、語彙面のマイナスではなく、発音上の問題として扱ってください。

* 談話構成の評価について

発話量の多少以上に、産出された発話の談話構成を見て判断するようにしてください。

* 流暢さの評価について

文法・発音面で課題がある場合は、そこで減点し、それを流ちょうさの評価に結びつけないでください。流暢さは、発話全体がどのように流れたか、コミュニケーション上の「障害」（言葉を忘れる、言葉の選択を間違えるなど、誰にでも起こりうる事象）をどのように乗り越えて、スラスラというより「自然に」話すことができたかで評価します。

(4) 信頼性の確保について

スピーキングテストは、パフォーマンステストであるため、テスト結果の信頼性を確保することが難しいテストです。テストにおける信頼性とは、誰が採点しても同じ結果が得られるという得点の安定性や一貫性を示すものですが、パフォーマンステストは、同じ質問に対しても受験者の応答は多種多様です。したがって、評価者にとって受験者の発話に対する印象が影響しやすく主観的評価になりやすいものです。このような特質をもつ JOPT のテスト結果の信頼性確保には少なくとも二つの方法があります。一つは、評価に際しては複数人で行い、テスト結果の誤差を少なくする方法です。もう一つの方法は、一回だけの評価ではなく、同じ評価者が数回、おそらく 2 回評価を行って、結果の誤差を少なくする方法です。対応することは難しいかもしれませんが、信頼性については常に意識しておくことが大切になります。

おわりに

本マニュアルの作成は2021年2月に着手しましたが、もちろん、ゼロから始めたわけではありません。2013年11月の当プロジェクト第1期の開始と同時に構想を練り始め、数え切れないほどの問題作成、その試行と評価、能力規定の作成、さらに、長時間に及ぶマニュアル自体の草稿練り直しという作業になりました。また、最終年度の2020年度は全世界を巻き込んだCovid-19の影響を私達もまともに受け、1年の研究期間の延期を許可されたものの、十分な試用もできないまま、プロジェクトを終えなければならなくなりました。ただ、幸い、プロジェクト終了前の2ヶ月の間に、介護士養成を行う森ノ宮医療大学にて約20人の留学生（介護士志望）を対象にこの暫定版テストマニュアルを使ったJOPT-Kの試行を行うことができました。また、（公益財団法人）北海道国際交流センター、京都外国語大学において日本語教師（母語話者、非母語話者とも）、日本語教育を専門としない国際交流に関わる方々（母語話者、非母語話者とも）をテストにしてJOPT-A, JOPT-B, JOPT-Cの試行を作成中のマニュアルを使って行いました。当プロジェクトを可能にした科研費の打ち切り寸前のところで、「母語話者であること、また、日本語教育を専門にすることを前提条件にしないテスト」によるテスト実施を目指したJOPTの試行が行えたわけです。この場を利用してご協力くださった方々に御礼申し上げます。

本マニュアルは「暫定版」であり、「初版」とするためには、まだ多くの作業が必要な状態です。何よりも本マニュアルを使ったテスト試行、そして、その後の評価・評定作業を繰り返し、テストマニュアルの有効性を高めなければなりません。IT技術の急速な発展により、人知を優に超えた活動がAIにより可能になっている現在、口頭能力測定もロボットを相手に話し、ロボットによって評価・評定することは可能でしょう。それも信頼度のかなり高い結果を得ることも可能でしょう。しかし、どんなに信頼度の高い評価、評定であっても、それらの検証は、生身の人間の会話活動を介さずして行うことはできません。まだまだこれからの研究課題とは言え、より高い妥当性と信頼度に加え、より実用的な口頭能力テストの開発を目指すJOPTには挑戦的なアイデアではないかと思われまます。JOPTは日本国内のアカデミック、ビジネス、コミュニティと介護の分野を舞台にした口頭能力測定を目指しますが、日本のみならず、世界の各地に存在する日本語使用場面（G: General）に共通する口頭能力測定も必要であろうと思われまます。

このように多くの検討の余地を残すものの、ここで一定の評価・評定基準を示し、それに基づいたテスト実施を行うための暫定版テストマニュアルを公開することは、長時間かけて行ったこの研究活動に一定の区切りをつけ、次のステップの弾みになるのではないかと思います。「はじめに」にも述べましたが、忌憚のないご意見をお寄せくださるようお願いいたします。なお、JOPT運用サイト https://jopt-team.org/?page_id=49 にはJOPT紹介ビデオ、JOPTインタビュービデオなどの資料を載せています。どうぞご参照ください。

Last but not least! 最後ですが最も大切なことを一言・・・本科研に関わったメンバーリストと関連業績リストを添付いたします。本科研にはこれらのメンバー以外に非常に多くの方々の協力を得ました。問題作成、問題試用、イラスト作成、サンプル動画撮影、本マニュアルの細部検討等々、お名前をあげれば切りのない方々にお世話になったこと、心から感謝し、結びとします。

JOPT 開発メンバー一同

2023.07.01

JOPT 開発メンバーリスト

第1期 (2013 - 16)

科研費基盤研究(A) (課題番号 25244023 「日本語会話能力テストの研究と開発：国内外の教育環境及び多文化地域社会を対象に」)

鎌田修 (代表)、伊東祐郎、坂本正、嶋田和子、西川寛之、野山広、六川雅彦、由井紀久子、李在鎬

第2期 (2017 - 21)

科研費基盤研究(A) (課題番号 17H00919 「JOPT の拡充と普及：汎用性と実用性に富む日本語口頭能力試験の実現」)

六川雅彦 (代表)、赤木弥生 (2019-21)、伊東祐郎、鎌田修、坂本正、嶋田和子、野口裕之 (2017-18)、由井紀久子、李在鎬

JOPT (科研) 関連業績リスト

鎌田修(2013)「プロフィシェンシーとは」『日本語プロフィシェンシー研究』創刊号 pp. 5-9

伊東祐郎(2014)「ことばの能力を測るとのこと」『日本語学』巻: 33-12 (10月号) pp. 6-15

鎌田修 (2014) 「日本語の会話能力とその測定・評価」『日本語学』10月号、巻: 33-12 pp. 16-27

鎌田修(2014)「地域の日本語教室とコミュニティーをどう繋ぐかー対話とプロフィシェンシーという観点からー」『ヨーロッパ日本語教育 18』 pp. 271-276

鎌田修、伊東祐郎、嶋田和子、野山広、西川寛之、六川雅彦(2016)「日本語口頭能力試験“JOPT”の開発と意義：アカデミック、ビジネス、そしてコミュニティー部門における共生に基づく言語使用能力の測定」『ヨーロッパ日本語教育 20』 pp. 413-414

嶋田和子(2014)「定住外国人に対する縦断調査で見えてきたこと～OPIを通して『自らの声を発すること』をめざす」『日本語プロフィシェンシー研究』2号 pp. 30-49

- 野山広・森本郁代(2014)「地域に定住する外国人に対する OPI の枠組みを活用した縦断調査の結果からみえてきたこと ―多人数による話し合い場面構築の可能性を探りながら―」『日本語プロフィシエンシー研究』2号 pp.11-29
- 李在鎬, 伊東祐郎, 鎌田修, 坂本正, 嶋田和子, 西川寛之, 野山広, 六川雅彦, 由井紀久子(2019)「日本語口頭能力テスト『JOPT』開発と予備調査」『日本語プロフィシエンシー研究』7号 pp. 28-49
- 李在鎬、伊東祐郎、鎌田修、嶋田和子、坂本正、六川雅彦、由井紀久子(2020)「口頭能力と自己評価の関連性について」『ヨーロッパ日本語教育 24』pp. 310-317

参考文献



- The ACTFL Provisional Proficiency Guidelines* (1982)
- The ACTFL Proficiency Guidelines* (1986)
- The ACTFL Proficiency Guidelines – Speaking, Revised* (1999)
- The ACTFL Proficiency Guidelines – Speaking, Revised* (2012)
- ETS Oral Proficiency Testing Manual* (1982)
- The ACTFL Oral Proficiency Interview Tester Training Manual* (1989, 1999)
- Swender, E. and R. Vicars, eds. (2012) *The ACTFL Oral Proficiency Interview Tester Training Manual*. Alexandria: American Council on The Teaching of Foreign Languages.
- Hadley, Omaggio A. (1986, 1993, 2001) *Teaching Language in Context*, First, Second, Third Edition, Boston: Heinle and Heinle.
- 鎌田修 (2014) 「OPI における“維持 (sustain)”の概念に関する一考察」筒井通夫、鎌田修、W. ヤコブセン共編著『日本語教育の新しい地平を開く』ひつじ書房
- 鎌田修、川口義一、鈴木睦 (1996) 『日本語教授法ワークショップ』凡人社
- (2000) 『日本語教授法ワークショップ (増補版)』凡人社
- (2006) 『日本語教授法ワークショップDVD』凡人社
- 鎌田修、嶋田和子、三浦謙一、共編著 (2020) 『OPI による会話能力の評価ーテストイング、教育、研究に活かすー』、凡人社
- 牧野成一、鎌田修、山内博之、斎藤真理子、荻原稚佳子、伊藤とく美、池崎美代子、中島和子、(2001) 『ACTFL-OPI 入門』アルク

図・表 一覧

<図 1 : JOPT が捉える口頭能力の構成概念>	p. 5
<図 2 : JOPT の流れ>	p.13
<図 3 : インタビュー環境の良い例>	p.17
<図 4 : インタビュー環境の良くない例>	p.18
表 1 : ルーブリック表による能力評価基準	p. 8
表 2 : JOPT 総合評定 : 「自立度」と「依存度」に基づく総合評定と下位区分	p. 9
表 3 : 「自立度」「依存度」をもとにした階層的総合評定 : JOPT 1~JOPT 5	p.22
表 4 : 評価・評定シート 1	p.23
表 5 : JOPT フィードバックシート	p.23

巻末資料

● JOPT 実施中の対応 -TIPS:Q & A-

<p>Q1：質問が聞き取れず、「もう一度お願いします」と受験者から頼まれた場合、どうしたらいいですか。</p>	<p>A1：まず、同じ速さで質問を繰り返します。それでもわからなかったら、ややゆっくりと質問します。まだわからない場合は、「理解できない」と判定します。</p> 
<p>Q2：質問が理解できない場合、やさしい表現に言い換えてもいいですか。</p>	<p>A2：「やさしい」日本語で言い換えてください。2度程度言い換えてもわからない場合は、そのまま先に進めてください。</p>
<p>Q3：受験者が質問が分からなくて沈黙したり、当惑したりした場合はどうしますか。</p>	<p>A3：質問をもう一度繰り返してください。それでもわからなければ、次の質問に進んでください。笑顔で対応することが大切です。</p>
<p>Q4：受験者の発話が途中で止まってしまった場合は、「助け船」を出してもいいですか。</p>	<p>A4：「助け船」は出さないでください。発話が途中で止まってしまった場合は、発話能力の限界にいると考え、評価の対象にしてください。</p>
<p>Q5：受験者が応答できずに、沈黙してしまっただけの場合どう対応したらいいですか。</p>	<p>A5：しばらく待っても応答できない場合は、「では、次にいきますね」と伝え、その問題は終わりにします。それに関しては発話能力の限界と考え、評価の対象にしてください。</p> 
<p>Q6：受験者が日本語で応答できず、母語あるいは英語で発話したときは、どのように評価したらいいですか。</p>	<p>A6：途中で、「すみません、日本語で話してください」と伝えます。評価に関しては、日本語で話した部分で評価してください。</p>
<p>Q7：受験者が質問の意図を誤解して、異なる（期待した応答ではない）発話をしたときはどのように評価したらいいですか。</p>	<p>A7：試験ですので、出てきた発話をもとに評価してください。</p>
<p>Q8：受験者が質問に対する発話を、想定外にたくさん話した</p>	<p>A8：5分程度長くなるのはかまいません。ただ、長く話しがちな受験者の場合、「そう</p>


<p>り、ゆっくり話してしまったために、15分以上の時間がかかってしまった場合は、どのように評価したらいいですか。</p>	<p>ですか、わかりました」などと言って、自然な形で切り上げてください。なお、長く話しても点数には反映されません。</p>
<p>Q9：RP（ロールプレイ）をスタートしたけど、内容を理解していないため、話の展開が意図しているものと異なる方向へ進んでしまった場合、どうしたらいいですか</p>	<p>A9：RPに限らず、設問の意図を勘違いしている場合は、そのタスクに関しては、ゼロ点となります。</p>
<p>Q10：受験者の声が小さく、「もう少し大きい声で言ってください」と言っても改善されないとき、どうしたらいいですか (例：回答の最初の部分だけ大きく、あとは小さくて聞こえない)。</p>	<p>A10：聞き取れない場合は、「聞き取れないので大きな声で話してください」を繰り返し、注意を喚起してください。</p> 
<p>Q11：受験者がかなり緊張している場合、どう対応したらいいですか。</p>	<p>A11：「リラックスしてください」「深呼吸してリラックスしましょう」などと緊張をほぐしてください。</p>
<p>Q12：受験者が途中で受験を諦めてしまった場合、どうしたらいいですか。</p>	<p>A12：受験者が諦めた場合には、評価は行いません。途中の問題を「無理です。できません」と表明した場合には、「そうですか。では次の問題にいきましょう」と進めてください。</p>
<p>Q13：収録したはずの音声が入力できていなかった場合は、どう評価したらいいですか。</p>	<p>A13：収録した音声を聞いて判定をするのが基本ですが、収録した音声がない場合には、発話を思い出して評価をしてください。あるいは、必要に応じて、再度テストを実施してください。</p>

表1：ルーブリック表 フォーム1

		機能面		形式面			
評価点		①タスク達成度	②流ちょうさ	③談話構成	④語彙	⑤文法	⑥発音
5		<input type="checkbox"/> 課題について、自力で対応できていますので、他者からの助けはほとんど必要ありません。	<input type="checkbox"/> スラスラと話し、コミュニケーション上支障をきたす流ちょうさの問題は見られません。	<input type="checkbox"/> 話にまとまりがあり、つながりもよく、非常に分かりやすいです。	<input type="checkbox"/> コミュニケーションを進めるための語彙や表現がうまく使えています。	<input type="checkbox"/> コミュニケーションを進めるための文法がうまく使えています。	<input type="checkbox"/> コミュニケーションを進める上で発音やイントネーションに分かりにくさや不自然さは見られません。
4		<input type="checkbox"/> 課題について、ほとんど自力で対応できていますが、ある程度他者からの助けが必要です。	<input type="checkbox"/> たまに言葉に詰まりますが、コミュニケーション上支障をきたす流ちょうさの問題はほとんど見られません。	<input type="checkbox"/> 話にまとまりがあり、つながりもよく、分かりやすいです。	<input type="checkbox"/> コミュニケーションを進めるための語彙や表現がほとんどうまく使えています。	<input type="checkbox"/> コミュニケーションを進めるための文法がほとんどうまく使えています。	<input type="checkbox"/> コミュニケーションを進める上で発音やイントネーションに分かりにくさや不自然さはあまり見られません。
3		<input type="checkbox"/> 課題について、何とか自力で対応できていますが、かなり他者からの助けが必要です。	<input type="checkbox"/> ときどき言葉に詰まりますが、コミュニケーションはできています。	<input type="checkbox"/> 話にまとまりがなかったりつながりが分かりにくかったりしますが、おおよそ分かる話が出来ます。	<input type="checkbox"/> コミュニケーションを進めるための語彙や表現の問題がときどき見られます。	<input type="checkbox"/> コミュニケーションを進めるための文法の問題がときどき見られます。	<input type="checkbox"/> コミュニケーションを進める上で問題となる発音やイントネーションの分かりにくさや不自然さがときどき見られます。
2		<input type="checkbox"/> 課題について、応答が不十分で自力で対応するのは難しいです。他者からの助けがたくさん必要です。	<input type="checkbox"/> 言葉がしばしば途切れ、コミュニケーションが成り立ちません。	<input type="checkbox"/> 話にまとまりがなかったりつながりが分かりにくかったりすることがあります。	<input type="checkbox"/> コミュニケーションを進めるための語彙や表現の問題がよく見られます。	<input type="checkbox"/> コミュニケーションを進めるための文法の問題がよく見られます。	<input type="checkbox"/> コミュニケーションを進める上で問題となる発音やイントネーションの分かりにくさや不自然さがよく見られます。
1		<input type="checkbox"/> 課題について、達成するのが難しく、応答もほとんどできていません。他者からの助けがたくさんあっても、自力で対応するのはほとんど不可能です。	<input type="checkbox"/> 言葉が頻繁に途切れ、コミュニケーションの流れが止まっています。／滞っています。	<input type="checkbox"/> 話にまとまりがなかったりつながりが分かりにくかったりすることが多いです。	<input type="checkbox"/> 語彙や表現の問題が多く見られます。そのため、コミュニケーションがうまく進められていません。	<input type="checkbox"/> 文法の問題が多く見られます。そのため、コミュニケーションがうまく進められていません。	<input type="checkbox"/> 発音やイントネーションの問題が多く、コミュニケーションがうまく進められていません。

表1：ループリック表 フォーム2

JOPTフィードバックシート		タスクの達成度	流ちょうさ	談話構成	語彙	文法	発音	総合得点
受験生の氏名	Aさん	Step2-1	5	5	5	5	5	4
JOPTレベル	JOPT5	Step2-2	5	5	5	5	5	5
JOPT得点(%)	132点 (82.5%)	Step3-1	4	4	4	4	4	4
コメント	ほとんど自力でやっているため、他への依存は必要ない	Step3-2	1	2	3	4	4	5
備考(自由記述欄)		平均得点	3.75	4	4.25	4.5	4.5	4.5
		満点	5	5	5	5	5	5

得点範囲	コメント	JOPTレベル
0 - 32	どんなに依存が可能でも、ほとんど自力ではやっていけない	JOPT1
33 - 64	かなりの依存が可能でも、自立してやっていくのは難しい	JOPT2
65 - 96	何とか自力でやっているが、かなりの依存を必要とする	JOPT3
97 - 128	だいたい自力でやっているが、ある程度の依存は必要	JOPT4
129 - 160	ほとんど自力でやっているため、他への依存は必要ない	JOPT5

レベル	得点	%	下位区分	下位区分 M	下位区分 L
JOPT 5	160-129	100-81	JOPT5-H	160-151	JOPT5-M
				150-140	JOPT5-L
JOPT 4	128-97	80-61	JOPT4-H	128-118	JOPT4-M
				117-107	JOPT4-L
JOPT 3	96-65	60-41	JOPT3-H	96-86	JOPT3-M
				85-75	JOPT3-L
JOPT 2	64-33	40-21	JOPT2-H	64-54	JOPT2-M
				53-43	JOPT2-L
JOPT 1	32-0	20-0	JOPT1-H	32-22	JOPT1-M
				21-10	JOPT1-L
				9-0	

平均得点 (5点満点)

タスクの達成度

JOPT評価 【JOPT - 】

※サンプルのAさんは、【JOPT5-L】となります。

